慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	20世紀中国の文学の変遷と日本の影響
Sub Title	The transition of twentieth-century Chinese literature and the influence of Japan upon it
Author	譚, 璐美(Tan, Romi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.116 (131)- 120 (127)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2016年度藝文学会シンポジウム「戦争と文学」 開催日: 2016年12月16日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

20世紀中国の文学の変遷と日本の影響

譚璐美

最初に、私のほうから、文学とは何か、戦争とは何かということに関して、大きな時代の流れと変遷について、ざっとご紹介したいとおもいます。

まず、「戦争」と聞くと、国際戦争、国と国との戦いをイメージしますが、そのほかに革命、内戦、さらには近代中国でいうと軍閥の地盤争い、小規模な地域紛争なども含めて考えられます。

例えば孫文が武装蜂起し、1911 年に成功した辛亥革命があります。これによって清朝政府が崩壊し中華民国が成立しました。しかし孫文の後を引き継いだ袁世凱打倒のために第二革命、ついで護法戦争が起こります。これも「革命」イコール戦争です。1921 年に中国共産党が創設されて労働運動に着手し、孫文とは別の「社会主義革命」を目指します。これも戦争であり、その間に軍閥の地盤争いがあちこちで起きます。そして中国共産党は、国民政府の主体である蔣介石の国民党との間で、1949 年まで延々と「内戦」を繰り広げます。つまりは「国内戦争」です。それと同時に、第一次世界大戦、日中戦争、第二次世界大戦などの「国際戦争」も起こります。二十世紀前半の中国は、こうした多種多様な戦争が相前後して起こり、互いの利害が複雑に絡み合い交錯しつつ、同時進行で展開されていった、いわば「戦争の時代」であったと言えます。

私は日本生まれの日本育ちですが、本籍は広東省です。百四歳で亡くなった私の伯父さんは中国共産党が設立された 1921 年に入党し、最初は使い走りのような仕事をしていたそうです。そして私にこう言いました。「自分は一生の中で、四回監獄に入った。一回は日本の監獄、二回は国民党の監獄、最後は共産党の監獄だ」と。共産党の監獄とは文化大革命です。文化大革命では十四年も重労働を

強いられましたが、豚小屋に寝起きして粗末な食事をしながらも、枝を二本切ってきて、お取り箸として使っていたそうです。なぜそんなことをしたのかと言いますと、自分自身の過去の習慣を維持し、正常な感覚を毎日自分で確認し続けるためです。そうでもしなければ確実に精神に異常をきたしただろうと思います。本人は愚直で潔癖な性格ですので、その間なにも変わっていません。変わったのは、文化大革命時の価値観なのです。世の中の価値観が逆転する中国世界で、自分自身が一つの価値観を持ち続けることはさぞかし難しかっただろうと思います。

政治の価値観が変化する時代にあって、そして 20 世紀前半の「戦争の時代」にあって、中国の「文学」とはどのような存在価値があり、戦争とどのように関ってきたのでしょうか。実は、文学でも価値観の逆転がしばしば起こっていたのです。ここでは文学の存在と変化について、大きく捉えてみたいとおもいます。

一　清朝時代まで中国の文学

文学は国によって様々であろうと思いますが、清朝時代の中国では文学は為政者のためのものであり、庶民のためのものではありませんでした。皇帝に遣える高級官吏から地方官吏にいたるまで、役人イコール文学者でした。それは、皆さんもご存知の任官登用試験である科挙制度によるものです。

科挙試験は、隋代の文帝によって始まり、唐代には最高段階の試験の合格率は 1 ～ 2％の難関となりました。試験に合格して士大夫になるためには、必須の教養として「経書」「詩賦」等、文学の素養が求められました。科挙試験は、明代になると「八股文」という厳密な形式で回答することが求められ、非常に大変なものとなりました。さらに清代には、「童試、郷試、挙人履試、会試、会試履試、殿試」に段階が細分化し、どんどん難易度が上がって行きました。この科挙制度は 1905 年に排除されるまで続きました。

なぜ 1905 年かというと、清朝政府は、日清戦争、義和団事変などに相次いで敗北し、改めて本気で富国強兵策を取らねばならないと考えたからです。そして軍隊を近代化するためには海外へ人材を派遣し、近代的な軍備を学び、近代的な武器を買い入れることが必要だと考えて、海外留学制度を開始しました。受け入れ先となったのが日本です。それ以前にも、19 世紀末に欧米への官費留学生派

遣制度を実施したことがありましたが、この時代にはすでに頓挫していました。

二　二十世紀初頭の日本留学ブームと辛亥革命

当時の日本は明治維新に成功し、アジアで最初の近代国家となり、日清、日露戦争にも勝利していたことから、清国政府は日本から軍事力向上の秘訣を学び、近代的教育を導入しようと模索しました。日本への留学者総数は、1902 年に約 500 人、1903 年に約 1200 人、1905 年には約 8000 人から 10000 人とも言われました。日本は「安・近・短」の留学先であり、「日本留学ブーム」に火がつき、「洋科挙」と呼ばれるようになりました。「安」とは費用が安く、「近」は距離的に近い国であり、「短」は短期留学を意味します。

一方、同時期の日本は脱亜入欧を目指して、欧州への官費留学生派遣制度を実施していました。当初は科学技術が中心でしたが、やがて法律、文化、芸術も含められました。例えば 1903 年には、派遣生 101 人、帰国生 50 人。1906 年には派遣生 49 人、帰国生 50 人で、毎年凄まじい数の学生が欧州へ渡ったのです。その中には、後の憲法学者の美濃部達吉、国際法学者の寺尾亨、画家の黒田清輝、浅井忠、文学者の夏目金之助 (のちの夏目漱石) らがいました。これらの派遣留学生たちは、その後の日本を背負って立つ人材に成長していきます。つまり、日本で欧米への留学ブームが起こっていたのと同時期に、中国では日本留学ブームが起こっていたことになります。

日本では、他のタイプの中国人留学生も育ちました。1905 年、清朝を打倒し漢民族の国家を再興しようとした孫文は、日本で革命結社「中国同盟会」を組織します。日本を拠点に、日本人支援者や中国人留学生出身の革命家たちと協力して、十回にわたる武装蜂起を起こし、1911 年、辛亥革命の成功へと導いたのです。私の父も、中国共産党に対する蔣介石・国民党の大粛清運動に遭遇し、1927 年に日本へ逃亡しました。当時 19 歳でした。日本では慶應義塾大学に入学しましたが、翌年、日本が山東出兵したことに抗議して「総帰国」を指揮して帰国しました。しかし弾圧を受けて再来日して、早稲田大学政経学部で四年間学びました。つまり、20 世紀前半に来日した留学生とは、学生であると同時に革命家、亡命者でもあったのです。

留学生には「文」と「武」の二種類がありました。「武」の典型例としてあげられるのが蔣介石です。1906 年に初来日し、二年後に資格を得て再来日した蔣

介石は、清国人のための軍事基礎教育機関である「振武学校」へ入学しました。そこでは日本式の軍事基礎教育を受けることができ、無事卒業して実地訓練を経た後、はじめて陸軍士官学校に入ることができます。蔣介石は振武学校を三年で卒業して、新潟県高田市にある日本陸軍第十三師団砲兵第十九連隊に二等兵として配属されました。そこで一年間の実地訓練を受けている間に辛亥革命が起こり、蔣介石は勇んで帰国します。陸軍の正式な許可を得ずに勝手に帰国したため、陸軍省の記録には清国派遣の軍事留学生 62 名のうち、蔣介石は「逃亡帰国者 3 名」のひとりとして記されました。

三　留学生による近代知識と近代文学の受容

日本は明治維新で開港以来、鉄道、物流が発達し、情報発信基地となった東京と大阪では、出版文化が花開きました。当時、中国人留学生たちは、大正デモクラシーを反映した書籍や社会主義関連の書籍に関心が強く、河上肇、堺利彦、山川菊江、山川均、高畠素之などを中心に、日本の書籍と欧米書籍の邦訳本を熱中して読み、自分で中国語に重訳し、中国へ送りました。

留学生たちが翻訳した書籍の点数を年代別で比較してみると、1896 年以前には 8 冊しかなかったのが、1896 年～ 1911 年には 958 冊に急増し、1912 年～ 1937 年には 1759 冊と、さらに増加しています。その後、日中戦争が本格的に始まった 1937 年以降になると、140 冊に激減しています。辛亥革命前後の時代にいかに日本の書籍が中国に影響を与えたかがわかります。「経済」「社会」「社会主義」などという日本語が中国へ逆輸入されたのは、この時期のことです。日本の書籍は中国留学生の情報源であり、中国革命の精神的拠り所であったわけです。具体的な人名を挙げれば、中国共産党を作った社会主義者の李漢俊（李人傑）は東大出身、中華民国臨時政府に議会を創設して中国初の憲法「臨時約法」を作成した宋教仁は早稲田大学出身、文学者となる魯迅も日本で学びました。

魯迅は夏目漱石、芥川龍之介、有島武郎から強い影響を受けました。そして中国にはなかった作風として、短編であること、見たままを率直に描き出す「写生文」の方式を取り入れました。「写生文」とは、正岡子規と高浜虚子が雑誌『ホトトギス』で欧米絵画のデッサンの概念を俳句・短歌に取り入れ、さらに散文にも応用した写実的な表現方法です。そして夏目漱石は『ホトトギス』に口語体で

『吾輩は猫である』を発表しました。夏目漱石は魯迅が最も影響を受けた日本の作家でした。魯迅は、夏目漱石の得意とした風刺と比喩を多用するスタイル、主人公を第一人称の「私」に設定し、著者の意見を存分に小説に反映させるという作風を、「近代化した小説」とみなして積極的に模倣することにしたのだと、私は考えています。

中国にメディア都市が誕生するのは、日本に遅れること約20年です。1920年代半ば以降、上海に雑誌、新聞、書籍の出版文化が花開きました。文字が読める知識階層と海外で近代思想を吸収した帰国留学生が増えたからです。そのおかげで、魯迅はプロの作家として活躍できたのです。

1918年、魯迅は陳独秀の雑誌『新青年』に小説『狂人日記』を発表しましたが、それは口語体の形式で、「私」である主人公の目を通して古い中国社会の矛盾を浮き彫りにし、風刺を利かせた短編小説です。中国で初めて登場したこの小説手法が、新文化運動の具体例として絶賛され、若い世代から圧倒的な支持を受けました。魯迅は時代の寵児となり、それ以後、近代文学の担い手として中国の文学界を牽引する一方、理想的な国づくりを目指して国民教育と近代化思想の普及運動に取り組んでいきました。それ以後の詳細については、長堀先生にお願いしたいとおもいます。